

弔辞

平成二十八年も残すところ二週間となった。巷ではジングルベルの音が響き、夜空にはきらきらとイルミネーションが光っている。安部さん、こんな時にあなたと永遠の別れをしなければならぬとは。神はなんという残酷な仕打ちをなさるのか。あなたの安らかな顔を拝んで、帰宅してからあなたの今年の年賀状を読み返した。そこには「今年も忙しい年になりそうです」と書かれてあった。その一年がこのような形で幕を下ろすとは、

長岡民話の会は平成十五年暮れに結成されて、今年が結成十三年目を終えようとしている。今年の長岡民話の会は華やかに素晴らしい活動を成し遂げた。あなたは平成十八年から事務局長に就任し、以来十年間会の牽引役として、ここまでみんなを引っ張ってきてくれた。この土台骨をささえてくれたのが、安部さんあなたのバリバリとした実行力であった。会員数も四十五名という大所帯に成長した。そして語りボランティアの要請が月に二十回以上もやってくる。その派遣割り当てもすべてあなたの力でふり分けてきた。

民話の会の活動の中心が「長岡民話百物語」だった。今年は十一回目を迎え入込客も300人を超えた。あなたは体調が悪かったのに、ここに出演した。過去十回の百物語の推進力はあなただった。全体の時間配分、語りの時間、出演者の出られる時間帯などを配分してはプログラムを作成する。まさに神技的編成能力だった。開演中は常に時間とにらめっこ、時間が伸びたり縮んだりしたときの当意即妙な対応が迫られる。こうして三日間のイベントを取り仕切った。ことしは、夜語りが入って二日間で終わった。

その前五月二九日・三〇日と佐渡での県大会にも一緒だった。帰りには赤泊から寺泊コースの佐渡汽船だった。このコース作りも安部さんあなたの発想だった。その船の中で聞いたのが、あなたの数奇な生涯だった。東京原宿の裕福な家庭で育ちながら、両親の離婚、東京空襲を恐れて、埼玉川越へ疎開し、そして子供のいなかった母の妹長井家の養女となった。長井家は、柏崎市郊外の南条にあり、そこで幼少時代から青年期まで育てもらった。あなたは実の親の記憶はないと言っていた。その実母の死亡の知らせが来たのが、四年前、とつくに死んだとのみ思っていた実母遠藤フジが実はその後、長く、生き続けたのだった。あなたの驚きはどんなだった事か。八月以来私は、何回か安部家を訪ね、お話を聞かせていただいた。あなたをモデルに下小説を書いてみたいと思ったからだ。その時東京の法律事務所から送られてきたという、遺産相続の関係する親族の家系図を見せてもらって驚いた。そこには遺産相続の権利のある姻戚関係の人が実に二八人も載っていた。

東京での幼いころ幼稚園に通っていたころのアルバム、そして中学卒業の時、成績が良く、上の学校に進学したかったのに、それを言い出せなかった悔しさ、それを察して養父母は卒業してもすぐ就職できる地元柏崎商業高校に入ることを勧めてくれた。養父母の長井井作・ナカ夫婦があなたをどれだけ親切にしてくれたか。その話は力を込めて語ってください。その時、養父が川越にいる養母ナカさんの妹夫婦に宛てた手紙を見せてもらった。

昌江が高校進学あたり、親の苗字を名乗らせたので、戸籍謄本を送ってほしいというものだった。養母長井夫婦は自分の子供の様にあなたを大事に育ててくださった。その手紙には実の子と同じような愛情あふれる手紙だった。安部さん、あなたはほんとうに周りの人から大事にされて育ってきたんですね。その養父母もあなたの手で心置きなく旅立つことができた。私の取材もあなたの入院で中断してしまった。この作品のフィナーレをどう書き継いだらいいのだろう。

あなたの民話の語りも絶妙だった。とりわけ「人の一生」の語りは、あなたの十八番だった。神様からもらった命は三十年だったのに、馬から三十年、犬から三十年、そして最後猿から三十年ももらい、人は九十年まで生きられるという話だった。あなたはまだ猿からももらった寿命の半分も残していたではありませんか。

あなたから南条から墓地を長岡に移したと聞いた。その墓には養父母の長井夫婦も眠っている。そしてあなたを生んだ遠藤フジさんは、あなたと別れた後どんな生涯を送ったのか。あなたと会って積もる話もしてくれるに違いない。

安部さん、あなたがこれほどまで民話の語りに情熱を傾けることができたのは、御主人はじめ二人のこどもさん、そして孫さんたちがみんなまで応援して下さったからだ。素晴らしい家族に囲まれてあなたは旅立った。自らの命の限りを知りつくしたあなたは、早々に事務の引継ぎをきれいに済ませた。この心意気にも驚いた。そして民話の会も今井さんというりっぱな後継者があなたの事務を丸ごと引き受けてくれた。ご主人は様々な仕事を持って今井さん宅に自ら届けに行ってください。民話の会もあなたの遺志を受け継ぎ、ますます発展していくだろう。残されたご主人も子供さんたちもみんなあなた亡き後のことを補ってくれるはずだ。安部さん、どうか心やすらかにお眠りください。さようなら。

平成二十八年十二月十八日